

浄土

正月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三號郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別取扱郵便物第三五二号)
昭和三十九年十二月二十五日 印刷 昭和四十年一月一日発行

第三十一卷

第一号

年 新 賀 謹

浄土宗宗務庁

総本山 知恩院

門主 岸 信宏
執事長 曾和 探玄

大本山 増上寺

法主 椎尾 弁匡
執事長 里見 達雄

稲岡 寛順

川口市北町 西福寺

鎌倉大仏殿 高德院

住職 佐藤密雄

浄土宗宗議会議員
福泉寺 住職

鵜飼 隆玄

滋賀県野洲町永原

西信寺住職

栗本 俊道

浄土宗宗議会議員

飯田 信弘

光運寺 住職
四日市市中部三

稲田 稔界

浄土宗宗議会議員

白井 玄祥

浄土宗宗議会議員

柴田 敏夫

横浜市港北区菊名町・蓮勝寺

浄土宗宗議会議員

白幡 憲佑

横浜市南区久保山・光明寺

浄土宗宗議会議員

児玉 諦円

名古屋市守山区

弘前市新寺町 貞昌寺

浄土宗宗議会議員 赤平昌導
(祖 畦)

高松市仏生山町

法然寺 細井照道

大分県佐賀関町

正念寺 丹羽貫誠

正 月 号



やまひきたらん事かねてしらず
生死のちかづく事たれかおぼえん もとも
いそぐべし はげむべし

法然上人御法語

—目 次—

表 紙 衿羯羅童子 浄瑠璃寺蔵

随 想	藤原弘道・中村素堂・佐藤治子...	(2)
人の魂に火をともし	今 東 光...	(4)
— . — . — . — . — . — . —		
座 談 会 現代社会の動きと宗教の役割		(8)
浄土問答 念仏と妄念	藤 井 実 応...	(13)
一言法談 生気の沙汰	渋谷 賢 応...	(24)
近世文名録 江藤澈英僧正	高 橋 良 和...	(18)
浄土土記 栗生野光明寺		(16)
— . — . — . — . — . — . —		
オリンピックに参加して	東 山 日 出 夫...	(26)
童 話 冬柿のなるころ	永 野 久 子...	(22)
寿 字 創 造	田 中 東 竹...	(7)
ご法語をいただく		(32)
創価学会手引 公明党の結成		(21)
寺院生活寸感		(22)
日本浄土教物 日本浄土教発達の由来	鈴木 成 元	(28)

新春に思う

藤 原 弘 道

(東山学園長)

賑々しく世紀の祭典に国中がわきかえった一九六四年も過ぎ、新しい年を迎えることになりました。オリンピックに明け、オリンピックに暮れた去年でしたが、世相は決して安定したとばかりではなかったようであります。国内では世界の人々を満足さすため新幹線が就業し、ハイウェイが縦横に走るようになりはしたが、世の不況と北国の冷害は相当ひどいようでした。とにかく多彩な旧年を送って又新しい年に入り、今年こそはの意気に燃える昨今であります。身心ともに充実した一年を迎えるためにも、この新年にあたって心に期さなければならぬ問題は多くあると思います。

毎年言われることではありますが、「一年の計は元旦にあり」と、一月の生活こそ一年を無事過すよう計画をたて、目標を定めていく月であります。騒々しい世の中ではありません

筆の念仏

中 村 素 堂

(書 家)

先頃名僧の墨蹟をたくさん陳列したことがあって、書の展覧会を見なれている眼にも、あんな清々しい静かな雰囲気にあふれたのははじめてで、全く圧倒されてしまった。

古来文墨に具眼の識者や茶人たちが、墨蹟のといつて、この格調を珍重する気持が泌々うなづけたのもあった。

頂相を、目前にその師家がいます様に尊重する禅門の人々は、その墨蹟に対しても、わざわざその作品をかけるだけの床を作るものさへある程大切にします。又禅門以外でも、その宗祖の御名や本尊の御名号などの軸を床に掲げ、そこに仏菩薩・祖師をお迎えしてある様に恭敬しているのである。

これは仏名を書けば、そこに何となく仏につながる思いが湧く、書く人も見る人もそうであろう。文字は不思議なものである。

外国の字にもその例はあるというが、漢字

心あたたまるレイ

佐 藤 治 子

(大正大学々長夫人)

ホノルル二日間滞在の予定の中で日系婦人会の有志の方々に短いスピーチをするだけと考えていた私に思いがけないことが次々と起った。ラジオのインタビューを済ませた私にヒツカム基地内の小学校の六年生が、是非私に来て下さいとの招待を知せて来た。広い米国を南北と旅行し、気候の激変と飛行旅行に実は文字通り、心身共に疲れていた。けれども二・三日滞在をのばしてもとまで云って下さる生徒や父兄の方々の熱望は「有難さ」と日本人としての責任」が私に疲れを忘れさせた。新聞社からホテルに戻ると二人の御婦人が待って居られ学校へとドライブして下さった。

日射しの強い校庭にハイビスカスが咲きほこっていた。教室へ入ると皆立ち上り、一人の男の生徒が机の下よりレイを取り出し、「よくいらっしやいました」と日本語で挨拶

が人間として恥じない生き方のプランを立てるのが真理でありましょう。しかも「初心忘るべからず」と言われるように、一旦志したなら、それをまっとうしようと努力し、目標に到達することが望ましいわけであります。除夜の鐘とともに過ぎ去った去年の経験を生かし、また反省して新年を迎えました。しかしながら去年の連続であるから、毎年のくりかえしであるとか、また同じだろうと判断することが一番危険であります。

鴨長明の方丈記にも「行く河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しくとどまることなし」と世の無常を言っています。

今日は昨日と同じではないわけでありま
す。また今日と明日は同じでもないわけであり
ます。ここに私達人間のとるべき態度を生
かし、より充実した今日にする。そして明日
は一層充実された日を迎える。このことは光
寿無量を仰ぐ私達の今年こそはの念に燃える
一つの指針ともなるものであります。

は遠い昔、人間の禍いとなるものを封じ、幸
せを祈る咒符の様な使命をもって作られ、そ
れが進展して象形の字、会意の字その他に発
達したものである。毎日字を書きつつ、その
出発に於ては人間の切実な念願を象徴するも
のから始まったことを、何か有難いものに考
えることがある。

言葉で申していることに永い命を持たせる
ものが書であるとも思い、毎日ものを書く初
めに私はまづ南無阿弥陀仏と、口称するのと
同じ気持ちでかなや漢字で書き、それから何か
と書き出す生活をしてかなりの年月になる。

今年の書き初めも亦念仏から書くことであ
ろう。私は筆で造仏する様に書きたいと思う
けれど、その時その時の気分で、よいと思う
ものはなかなか書けない。ただこの頃はこの
様なことが何か楽しくてしている様で、一念
一念のこもったものでなく、口ぐせの念仏の
様にしていることを、省みてひそかに恥じて
いる時もある。筆を弄ぶことのおすきな方々
に、時々この筆念仏をお勧めし、これを念仏の
浄業だなどとアヤシゲなことをいっている。

し、それを首にかけてくれた。代表の生徒と
思った所が次々と多くの生徒がレイを持ち出
し「ウエルカム」とレイを首にかけ頬にキッ
スをして行く。たちまち私の首はレイでうづ
まった。香りにむせびつつ「言葉の不自由は
あっても固い握手で心を結びましょう。世界
平和は皆さんの手で云々」と涙ぐむ思いで、
御礼にこの言葉を添えた。基地の新聞に大き
くこの言葉がのせられていたのを後で知らさ
れた。レイは一人々々が庭のブルメリヤと云
う花で作ってくれたものとか。

帰路空港で滑走にうつった飛行機の窓より
遙か屋上に二三人の父兄が立っていられるの
を見て、帯の下の方汗ばんでいる事も忘れてし
まう位の感激に浸った。あとでヒッカムは日
本軍に空爆された所ときき、「ああ訪問してよ
かった」と。そして三十人の生徒さん達の礼状
で、私の飛行機が夕日の中に消えて行くまで
無事な帰国を祈り見送っていたというこの三
人の父兄の事を知らされた私は、思いがけな
く親善の一助となれた事を思い、手作りの香
り高いレイは今も私の心にかけてられている。

人の魂に火をともし

——ゲーテの遺跡をたずねて——

今 東 光

(作家)

私は先般ヨーロッパを旅行した際、ゲーテの遺跡をおとずれる機会を持った。彼が坐った椅子に坐ってみたり、ペンを取ってみたりして、古哲人に思いをはせて、感慨無量なものがあつた。

ゲーテの二十才代はさっぱりいけなかつたらしい。毎日ぐらいラブレターを書いては、毎日失恋をしていたらしい。甲の女性に出しこの人は駄目といわれたら、ではその次という風に、毎日郵便配達みたいにやっていたらしい。考えてみる

とそれが当り前なのであつて、地位もなく、無名でろくでもない文章で、甘ったるい文章しか書けなくて錢も無いとなると、今の娘さんが賢いように、千七百年代当時の令嬢だってそんなものにひっかかる筈がなくて、ゲーテは三日にあげず失恋していたということである。そしてそういうグループがいて、ブラブラごろついて歩いていた。

ところが彼が二十一才の時、友達が集っている時に、「何かおい皆おもしろいものはないかな」という話になった。一人が

「町はずれの教会に気違いの牧師が居て、何か吠えているそ

うだが一つからかってやろう」

日曜に教会に行ってみると若い牧師が声をからしてやっている。ところがよく見ると信者もほとんどいないのに、汗をたらして吠えている。前列に青年達がならんで坐っているとその牧師が、

「お前達は何だ」

ということで問答が始まった。21才のゲーテは法学生であった。

「法律なんて何だ、あれは人間がこしらえたつまらないものではないか。それをそんな若い者が全エネルギーを注いで満ちしているのは余程低能だぞ」

「ではどうしたらいいのだ」

「人間の魂を打つようなことをせい」

ゲーテは毎日ラブレターを書いていたが、相手の魂を打つようなことはしなかった、こうした問答の中でゲーテに「チン」とくるものがあったらしい。ゲーテは

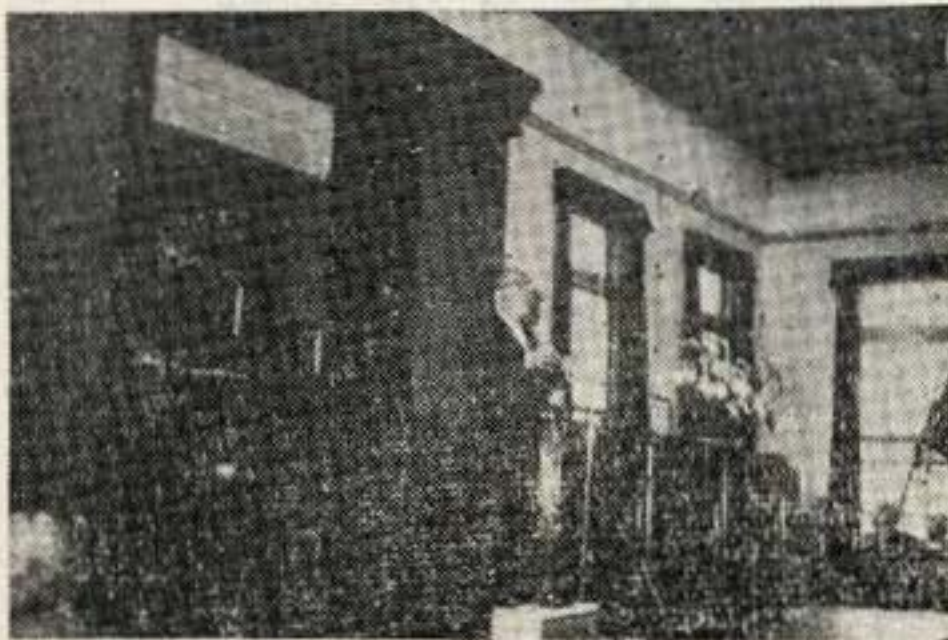
「我々は何をしたらいいか」

とただした牧師は永々と演説をした。その当時の所謂ドイツの思想は、七面倒くさい、固苦しい保守伝統の思想であり、全ての文化はフランスの影響下にあるいくじのないものであった。牧師はそんなものは全部駄目だといった。そしてゲル

マン民族はこうあらねばならん、その運命はこうあらねばならんといろいろ説いた。ヨハン、ゴットヘルゲルという詩人である二十六才の牧師が二十一才のゲーテのろうそくに火を点じたのは、その時である。千七百七十年という年はゲーテにとってはそういう意味で大変な開眼の年であり、ヘルデルにとつてはおそろるべきたのもしい後輩を得た年であった。

ゲーテはヘルデルの指導で詩を書き、八十何才死ぬ迄詩を書いている。ゲーテから詩を取ると半分なくなってしまう程ゲーテの詩の比重は大きなものをしめている。ゲーテが所謂詩魂を開拓され、仏法でいう新田開拓され、二十才より八十才迄は詩的にものを感じる自覚が、大きなゲーテと力となっているのである。「ウェルテル」を書いたのは彼が二十四才の時である。

みなさんに是非記憶しておいてもらいたいことは、自らにゲーテにならなくともゲーテのような



(大正大学にて講演中)

人に燈を点火する人になるということである。

天台宗の伝教大師の言葉に、「一隅を照らす」という言葉があるが、この一隅を照らすフランクフルト、アンマインの片田舎での二十六の青年牧師のフアッションというものが、ついに後年のゲーテを生んだということは、これは実に驚くべき因縁物語であると思う。

私はほうぼうへ行っておしゃべりするのであるが、私はいつかはヘルデルになれるであろうと考えている。私が死んだの後になって、私は今東光に火を点じられたという思いを残したいと思う。その役割は私にある。世界の檜舞台には出られないが、このヘルデルの役割は果せると信じている。みなさん方も、このヘルデルの自覚をもって、俺はヘルデルになろう、何時かは一隅にあって人を照らして日本に偉大なる力のあるものを、日本に偉大なる天才を生み後世に残すというそういうものを生み出すだけの自覚を持ってもらいたい。

こう感じて以来私はゲーテを読み直してみるのが、非常に味わい深いものがあります。実にゲーテは、ヘルデルによって引き出された力を以て、多くの若い人々を導いたのでありました。

純 真

魂のこよなく美しい徳よ、

愛情のこよなく清らかな泉よ！

パイロンよりもパミールよりも

まさってまれない理想よ！

他の情火の燃える時、

おん身の情けあつく弱い光は失せる。

おん身知らないものだけが、おん身を感じ、

おん身を知るものは、おん身を感じない。

女神よ、おん身は樂園では

私達と一しょに暮らした。

今もおん身は、朝、日の登る前に、

そここの草原に現われる。

やさしい詩人だけが、

霧の衣をまどって行くおん身を見る。

日の神が来、霧が遠ざかると、

霧に包まれておん身も消え失せる



歳の暮も近い、小春日和の午後、いつものように、宮中より退出して自室に帰り、衣服を改めて、吏官の蒼はゆつくりと庭へ出た。すると、待ちかまえたように可愛いらしい声が迎えた。「おかえり」「オカエンナサイ」「おかえなさい」これは三人の孫たち

である。その大きく輝いた瞳が蒼にとってこの上ない宝であった。口々に、その日のできごとを告げるのを、いちいちうなづきながら聞き終ると「ところで、お前たちは、うれしいこと、めでたいこと、と言ったらどんなことかねと尋ねた」不審そうに見上げる孫たちに、笑顔で応えて促した。末の子があまえるように、「アノネ、ワタシハオイシイモン、イッパイタベテ。オウタヲウタウコト」と言う「なるほど、そうだな」。次に中の男の子が、「ぼくが思うにはね。楽にくらしていけるもとは、やはり田でしょ。だから田畑を持っていることだよ。それもちゃんと耕やさなくっちゃいけないけれどね」。と言う。長女

は静かに「わたしは、やっぱり人として生まれて、いつまでも健康で長生きすることだと思いますわ。年をとった人、そうおじいさんみたいな人こそめでたいしるでしょう」と笑う。

「そうかな。いや、ありがとう」

しばらくして、蒼は満足げに自分の机に向かい、筆をとりあげた。間もなく来る新年の

寿字創造

田中東竹

賀に、何かめでたい文字を作り献するならわしを、黄房は楽しみにしていることを、今日言われたのだった。今までに、天地の間に宿る万物の形象から多くの文字を作ってきた蒼も、こんどは、孫たちのことばにヒントを得て、まとめあげたいと思ったのである。

長久を語った長女の言が印象的だった為かまず「老」（長毛曲身の老人の杖をつく形）

を書いてみた。次に、よく耕作した田の形、即ち整ったあぜを象った。また、手にもっているしるしもつけてみた。そして、なつめや栗をほしがる末の子の口を思い出して「口」を、またおいしいという「甘」を書き加えてみたりした。そこへ仕事から帰った息子が燈をもって入って来た。蒼は、自慢そうに書き上げたいくつかの文字を見せた。

「ほう、老人と田のあぜですね。杖がない。口があるのはうまい物がとれたのですか。こちのは手で捧げてるのかな。……」そんなことを言いながらながめていたが、ややあつげんな時のうたうようなうなるようなあの声が囁（チウ）と似ているから、そんなおじいさんのうれしい様子を作ったのですか。チウと読むと、受けとるともなるし、一体、何ですか、この字は」おかしそうに笑った。「いや、わしにもよく説明できんのじや」と答えた。



現代社会の動きと宗教の役割

— 浄土のビジョン —

司会 浄土のビジョンを語っていただきましたと思いますが、その前に、現代社会のうきと、それに対する宗教の問題、浄土教の役割など、いろいろ問題があると思います。

最初に、現代社会の動向について、どのように先生がたは、現代の社会をあらんになつておられるか、また、それについて、どういふふうにより日本人として、我々としては処していくべきか、この辺から、お話をうかがいたいと思います。

最初に、松本先生ひとつ……

現代の世界のうき

松本 現代の社会ということなんですがこれには、国際の問題と国内の問題とわけてみてもいろいろあると思います。おしなべていま世界は転換期にあると思うのです。いわゆる曲り角に來ていると云えます。政治、経済思想あらゆる意味において曲り角に來ている。いま国際社会において、一番問題になっているのは、フルシチョフが解任された、ということと、中国が原爆実験をやったということだが、しかし、これをみても感じられ

ることは、その底に流れる世界の動きが転換期に來ているということです。

いま世界は転換期にある

— ソ連と中国の場合 —

どういう転換期かということなんですが、国際政治の上からいうと、この中国とソ連が大きな一枚岩の上に団結しておるといふ時代はすでに過ぎてしまった。そして、中国とソ連は、外交方面において非常な相違を來たしたということなんだが、その底に流れておる動きはどうかというと、必然的にこうなったというより外はない。ソ連は、西ヨーロッパ文明、ことにヨーロッパならびにアメリカを目前の対称としていかざるを得ない立場にある。ところが、そのソ連が、そういった対称の国々をながめて結論としていえる事は、今までの、マルクス・エンゲルス・レーニンの考えを、そのまま露骨に教条主義的におしだしたのでは、やっていけないという立場なのです。

というのは、マルキシズムの対称になる、大きなインピアリズムあるいは大ブルジ

ユアの団体というようなものが、一般国民大衆を搾取しておるというところに、マルキシズムが成立するのであるが、そういう姿が、ヨーロッパ・アメリカにはなくなった。いわゆる敵がなくなった。ティピカルな、典型的な資本主義がなくなった。典型的な、植民地争奪戦と帝国主義的な生き方がなくなった。

そういう敵のない対称にむかって、ソ連がどう働きかけてゆくかといえば、共存政策でいかざるを得ない。平和共存の政策は、ソ連としては当然到達すべき運命と思う。

これにひきかえ、中国はどうかというと、中国をとりまく国々は、まだ低開発国であり植民地でありあるいは半植民地の状況を脱却して、これからやっと、ナシヨナリズムをかきたてて国づくりをしてゆこうという段階にある。従って、そのなかには、封建的な遺物もあれば、帝国主義的、資本主義的な遺物もある。

このようなものに対しては、マルクスエンゲルスの原理の考えを露骨に教条主義的におし出していかまわれないと、そういう対称があるというふうに見られるのである。

このように、中共は、どこまでも教条主義的にゆく。ソ連は、平和共存でという状況にあるという、根本原因があるとみざるを得ない。

ところが、それでは現在の世界の状況に処

出席者

松 本 徳 明

(大正大学理事長
芝学園長・文博)

佐 藤 密 雄

(大正大学々長・文博)

鵜 飼 隆 玄

(浄土宗総務局長)

司 会 安居 香山

してゆくわけにはいかない。中共とソ連が分

かれたのでは、共産主義陣営全体が弱体化——してゆくということは、わかりきっていることなので、その弱体化をふせくという努力が世界共産党の中にはおこっておる。これが一

つには、フルシチョフの退陣ということになってあらわれておると、私は思います。

そのように、共産主義陣営全体が、分裂しあるいは統合しようとする努力がなされているが、これも歴史的に国際的規模においてながめるときに、共産主義そのものが曲り角にきておると云わざるを得ない。

西欧の国々

しからば、西欧陣営は一体かと云えば、西欧陣営も強力な敵を緊迫した空気の中にうけておるときならば団結しうるが、平和共存の風をふかされると、やはり自分の国々の利害関係がからまってきて、つよい団結ができなくなってきた。そこに、ドゴールのあのうきがあり、最近においては、ドイツとフランスとの色々なトラブルがおきた。このようにいま西欧陣営は再分裂の方向にすすんでおる。

しかし、それならば、これは分裂しっぱなしかというと、全体にそうではないので、経済的、政治的にみても、ヨーロッパは一体であり、その典型的なかたちがEECというか

たちになってあらわれている。とにかく、ヨーロッパは一つのヨーロッパとして団結してゆかなければならない。政治的、経済的統合ことに、経済的統合の上に政治的統合をおこなおうとしておる。しかし、この政治、経済の底にながれておる。思想は、ながい間ヨーロッパを支配しておる。ナシヨナリズム、マッテイアリズムというものを清算して、運命共同体、各民族が運命を共にするものだという。

世界は運命共同体の方向へ

原爆一つ、水爆一つおちたならば、国境を無視して全滅してゆかなければならないという、この運命が前にふさがっておる。経済的にみても、バラバラではとうていやってゆけるものではない。こういう考え方が、ヨーロッパに非常に強くなって来ている。

かつては、学者が、そういう説をとなえておったが、今は国民大衆がそれを感じるようになった。いわゆる運命共同体の考え方これを基本として、その考えのもとに経済政治というものがうちたてられておるといふ現

実を私たちはみるならば、西欧文明は分裂するものではないと、それは一時の現象であつて、やがて大きな統合というか、融合というか、それは色々の考えがまだ統一されてないが、いずれは、そういう方向にすすんでゆくと考えます。

従つて、西欧陣営も脱皮して新しい方向に進展してゆこうとしている。のこる新興諸国ならびに日本はその間にあるが、これも今独立能力は実際にはないのであるが、世界状況から独立を勝ち得て、そして国造りに懸命になつておる国々、まだ生れたばかりで、いろいろな悩みをもつておるが、これもやがて、古くさいナシヨナリズムだけで国づくりがなされるものでないと、経済的にも自給自足のできる国もほとんどなく技術的にも殆ど外国から援助してもらわなければならない。あらゆる意味において、先進国から協力援助をあたひ、そして立派な国づくりをしてゆかなければならないという大前提があるので、それから、それに向つて段々めざめてゆき、いろんなトラブルはなくなつてゆくと思うのです。このように、世界はいま一つの大きな曲り角

にきておると思うのであります。

司会

いま、松本先生に大きく世界の経済社会、思想の方面から現在の世界の状況を分析していただいたのですが、つぎに佐藤学長先生いかがでしょうか。現代社会についてなにか大きく感じられている問題について、

東南アジアと仏教

佐藤 いま、松本さんのいれたように、マルキシズムが、マルクスの予言通りに動いていないということが必然的にかれらも新しい世界観をもたねばならないし、それに対する資本主義的な立場の人びとは、修正資本主義も、もう古くなつてきているのではないか。それで、仏教に近づけて、そのようなものを考えてみると、それはいま単的には東南アジアにあらわれている。東南アジアの方では、たとえば、同じベトナムでも北ベトナムは共産ゲリラが、仏教は全面的に認めないから、なにかしら出そこなっている。それからアメリカの方でも、フランスの長い間のカソリック教育というか、キリスト教的に傾きすぎているために事件をおこしている。

そのために大正大学を出たトムザック君がこの間来て、私どもと話をしていたのですが、やはり中共の方は仏教徒ではないけれど共産ゲリラの方は、仏教というものに注目し仏教が反カソリック的立場で南ベトナムで、カソリック的な政権が立つと、それに反対しているということに注目している。あるいは内々ですでに仏教徒的共産ゲリラが、だんだん南ベトナムの方に入ってゆくのではないかという憂いがある。

非生産的な面をあらためる

しかし、トムザック君なんかは、仏教はしっかりしているから、そんなことはない。のみならず、ベトナムの政権もカソリック的にならないように關心しているである、といていた。しかし、私はトム君に、ベトナムのみならず東南アジアの仏教というものは、ある日本人は東南アジアの仏教の僧侶を非常に純心で素朴だから、日本の仏教もあのようにと考える人も少くないが、単的に云って非生産的な仏教をあらためなくてはだめだ、と申しました。

私は、カラチで回教寺院に行きましたが、どこの回教寺院でも同じであって、ベトナムやタイは仏教の寺即ち学校のようなもので、そこで小学校のクラス高校のクラス、大学以上、三十才四十才の人たちが集って勉強しているのです。机の上に経典をおいて、ワイワイいっているだけのことである。ちっとも世界状況や世界観に目ざめるものでなく、又信徒の思想を啓発し、信徒が生産意欲をもやすような指導というか、生産技術の指導でなくまた精神的にはげましをあたえるような勉強は、少しもしていない。そのような中ではだめだ。トム君は、軍隊の仏教徒指導者で中佐だが、本人も学校をもち四十人ほどの生徒もいてそれに柔道と仏教を教えているといっておったので、私は、とくに南方仏教のあり方について一言述べたのです。

戒律について

それは私がかつて長井真琴先生に述べたのですが、近ごろ南方仏教を日本に植えこまなければならぬという説もあるが、じゃ南方の戒律のままの教団生活を、いまの日本の坊

さんがしたらどうだろう。やがてみるみるうちに仏教はなくなってしまうだろうと申しましたが、今でもそのように考えております。それですので、仏教の方でも、松本先生のいわれたようないきさつがあつて、その一方と一方との出会いが。南方仏教でおこなわれておると思うのです。第三次大戦後、南方地域でベトナムでおこなわれているので、そこを我々は、南方仏教に対して、なにか教えなくてははいけない。そのためには松本さんのいわれた世界状況の分析、両派の思想動向、それが實際上どうなっているか、それに氣をつけて、よく学びとって、そして我々も新しい考えをもってゆかなければならない。

司会 鵜飼局長さんは、そういう面からみて、ハワイを廻って来られて、ハワイの状況などみてきて、いまのような問題に関連してなにかございますか。

教団の沈滞の理由

鵜飼 ハワイと関連してといわれてもなんですが、私のみた感じとしては、ハワイは日

本の明治、大正といった感じがする。気分的にはすくなくとも昭和のセンスではない。だから、我々行って笑ったのですが、明治の人は日本へ来ると古きよき時代が感じられてうれしいというが、そのような感じがしましたね。

いま日本で私が感じていることは、戦後の教団の沈滞は、ちょうど明治維新と同じケースでないかと、私は思います。まあ、状況はすこし違いますが、というのは明治維新は人間的に開放された坊さんが、教団の問題より自分の問題ととりくんだという所に、仏教々団の沈滞があった。その後には先覚者が出て再び仏教々国としての権威力になってもらって復活した。

敗戦後の日本には敗戦により宗教的な無重力地帯というものがある。それがポツカリでできたという感じがある。従ってその条件としては坊さんが、経済的な条件が困難でありその時は、すでに坊さんである前に、まず人間であるというように意識されて、その問題が最初に解決されようとしておる。教団自体の機能というものが一応放棄されたかたちで

はないかと思う。

新興宗教と教権主義

そして、一般の人びとの信仰的な感慨というか欲求というかがあるところへ、いわゆる新興宗教のアクティブというものがある。しかし、そのゆき方について、私は新興宗教のアクティブな行為が教権主義的だと思うのです。それた内部的には、非常な共産主義的な細胞組織活動だとか、軍隊的な組織活動だとか、いろいろ云われますけれども、しかしすくなくともどのような条件であっても、一つの教権を中心とした動きというものが、新興宗教をあそこまで強くのばし、興隆させてきた。その反面、教団というものは、やはり人間の生活条件の追求というものが先決となっていたために、教権というものがおとろえてきた。

一番、仏教々団の中で、教権を堅持してきた東西本願寺が、教権というものは非常に没落したといっている。戦後における異安心問題がなくなったという事が、東西本願寺のいうように、教権の没落だと思う。

教権の没落にともなって、真宗教団というものが非常に弱体化してきたと云える。

それが、この戦後二十年近い教団の実際の姿ではないかと思う、それが同時に、私たちの教団でも同じことがいえる。

一般大衆は、やはり最近ある程度、宗教的な復興ムードというか、信仰的に復活しようとするムードが生まれている。ただ、その生れ方が昔は寺檀の関係、おれの所の寺であるどこその檀中であるという基礎的なものが形式的であった。この頃は、個人的信仰が問題となつて、個人の信仰というような事がある程度芽をふきかけたという感じがします。

家族の真の喜びは、子供たちに尊敬されると同時に子供をも尊敬し、必要なだけの訓練は施すけれども、決して程度をこえないことを知っている両親たちにのみ与えられる。その様な両親たちは、子供が独立を要求する時のあの恐ろしい紛争を知らずにすませるであろう。

バートランド・ラッセル

浄土信仰問答

念仏と妄念

藤井実応

(浄土宗布教師)

「念仏を一心に申したいと思うて念仏するのですが、妄念が出てきたり、心が散ったりして、なかなか一心に申されません、どうしたらよいものでしょうか」

これはよく質問されることであり、誰でも一度は自身の問題となる大切なことであると思う、法然上人の時代に於ても、すでに問題になったので、伝記の中にも出てくるし御法語の中にも懇切にその導きが述べられている。この質問に対して私は先づ法然上人伝(勅修御伝第十六卷)にある有名なお話をしてそのお答えとしている。

上人が天王寺に居られた時、高野にいた三論宗の大家・明遍僧都が、善光寺に参詣せられたことがあったが、天王

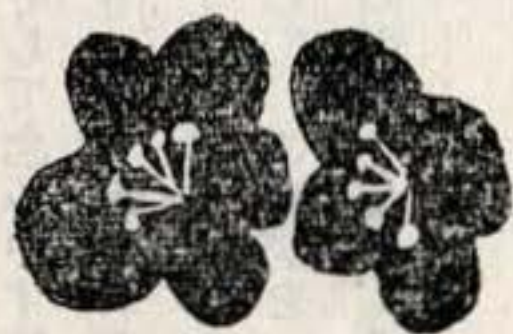
寺に上人をたずね参られた。まず使にて案内せられた。上人は客殿に出られて「これへ」と言われた。僧都はそこへ入って、まだ居なおらぬ間に

僧都「このたび、いかがして生死(まよい)を離れることができましようか」

上人「南無阿弥陀仏と唱えて、往生を遂ぐるにこしたことはないと存じます」

僧都「誰もさように見えてはおります、しかし念仏のとき心が散乱し、妄念のおこるのをどうしたらよろしいでしょうか」

上人「欲界の散地(欲にとらわれて生きねばならぬ人間は、生れつき心が散るようになってきている)に生をうくる



ものは、心はどうして散乱しないでおられましようや、煩惱具足の凡夫です、どうして妄念をとどめることができましようぞ、そのことは源空も力及びません、心は散り乱れ、妄念は競いおこるけれども、口に名号を唱えますなら、阿弥陀仏の願力に乗じて、決定して往生いたします。

僧都「これをうけたまわらん為に、参ったのであります」

とて僧都は、前後には少しも詞なく退出せられた。初対面の人が、一言も世間の礼儀の詞もなくして退出せられたことよとて、人々は尊びあった。

さて上人はうちへ入られて

「心をしずめ妄念をおこさずして念仏しようと思うのは生れつきの目や鼻を取りはなちて念仏しようと思うようなものだ、そういう道理はない、散心ながら念仏申すものが往生すればこそ目出度き本願と申すのである」と門弟たちに教えられた。

世間的な挨拶の言葉もなく、坐るか坐らぬかに早や法問の問答、法問終らばまた速かに退出する、その真剣な求道の態度は、並居る門弟たちも感激したと伝えられるが、今

日のわれらも共に頭の下るおもいがする。「この度如何して生死を離れ候べき」とは、当時の求道者たちの殆どが、日常挨拶のように使われたらしいが、しかしこの言葉の持つ意味こそ、お互人生の一大事なのである。釈尊出家の動機も「生老病死憂悲苦惱」よりの解脱を求めてのことであった。生老病死憂悲苦惱というも、古からいわれている生死の一大事と同じ意である、生れてやがて死んでゆく人の一生、人はいかに生きゆくべきか、生き甲斐ある人生、価値ある人生、ほんとうに生きるとは何であろうか、それはまた、安んじて死んでゆける道であろう。生きる依りどころとなり、死して帰するところを明にする、即ち生死を超えた、さとりの世界を求めずにはおれぬ、これこそ生死の一大事である。念仏こそ、この生死の一大事を解決しゆく生死をのり超えて、永遠に真に生きゆく唯一の道である。と、上人は体験をとおして述べられた、そして念仏申す時におこる妄念のことについて明らかな導きをせられたのである。

次に法然上人御法語中の一、二を引用して、この問を一層明にしたい「心のすむ時の念仏と妄念の中の念仏と、その勝劣は如何でしょうか」

「その功德は等しくて、少しも差別はない」

「どうも納得ができません、なぜならば、心の澄む時の念仏は余念もなく一向に極楽世界の事ばかり思われ、阿弥陀仏の本願のみ案ぜられるので、何ら他の雑^{まじ}わるものがないから清浄の念仏であります、ところが心の散乱する時は身と口と意が調わず、口には名号をとえ、手には数珠をまわすばかりでは不浄の念仏といわねなりません、どうして等しいといえましょうか」

「この疑をなすのは、まだ本願のいわれを知らぬからである、阿弥陀仏は悪い行をする衆生を救わん為に、生死（まよい）の大海に、本願の船を浮べたもうたのである、たとえば重い石も、軽い麻殻も一つの船に入れて、向うの岸に着けるようなものである、本願の勝れていることは、如何なる衆生も、ただ名号をとえうるほかは別の事はないのである」

（念仏往生要義抄）

「先ず名号を唱えなさい。名号の徳として、妄念も自ら止み、願心も自ら生ずるのである。ましてや本願のみ心は乱れる心の止み難い者を導かんが為である。妄念止みがたいについても、一向に本願を仰ぐべく、散乱静まりがたいについても一向に名号を唱うべきである。」

（決答授手印疑問抄）

向阿上人の帰命本願抄にも懇切に、この問題を指示してある、その一部を引用して結びとしたい。

「わざとやめようとすれば、妄念はいよいよ絶えぬものである。妄念起るならば起れとうちすてて、妄念をかえりみないで念仏申すが、念仏申す要領である」

「みほとけのみ名をとえうる一声の風

すみやかに妄念の雲をはらい

阿弥陀ほとけの誓願の月

おのずから信心の露に浮ぶ

げにたれか往生をとげないものがあるうか」

起てる農夫は座せる紳士よりも尊い

——フランクリン——

いかなる教育も逆境に及ぶことなし

——ディズレリ——

無智を恐るるなかれ、偽りの知識を恐れよ

——パスカル——

浄土風土記

粟生野 光明寺

—法然上人火葬の霊場—

「浄土根元地」と大字の刻まれた石塔が門前にいかめしく建てられている。門前から奥は、如何にも総本山らしい偉容と、幽邃さがただよっている。紅葉の大木が参道の両側を埋め、秋ともなればさぞ美しい事であろう。

山門から本堂までは、かなりある。なだらかな石だたみの階段が、延々と続いている。この階段を登り切った所が、一段とひらけ、その正面が御影堂となっている。十八間四面の堂々たるこの建物は宝暦三年（一七五三）再建されたものである。この堂にまつられている「張子の御影」といわれる法然上人の像は、なんでも上人が七十五才で讃岐に流罪になられた時、後の世のかたみにとて、船中で母からの手紙をもとに作られたものとされている。

この御影堂の後が、御廟になっているのであるが、これが仲々高い所にある。そして、本堂裏から廊下づたいに参詣できる様になっている。なんでも百段近くもあったと思われるが、お念仏を申しながら上るときは、息が切れて中休みとしなければならぬ程の急な坂である。この階段を登りつめて、小造りの

御廟にぬかずくとき、誰しも身近に祖師への追慕の情を禁じ得ぬものがあるであろう。

しかし、それにも増して法然上人への追慕の情をそそり、念仏法門を受けつく一人として、感激を新たにし、身のひきしまるのを覚えるのは、「円光大師火葬跡」とされる霊跡の前に立った時であろう。

みかげ石の垣につつまれ、一体の仏像と、二基の燈籠で飾られたこの霊跡は、御影堂から書院に行く途中にある。京都を去る遙か遠い郊外の粟生野の静寂の中にあるこの霊跡には、尋ねる人も少ないようであるが、吉水の流れを汲む者は、一度はここに至って、来し方、行く末を考える時を持ちたいものである。七百五十年前のさまが、目に浮んでくるに違いない。

嘉祿の法難

これこそ、ここにこの霊跡を置かしめたゆえんのものであった。法念上人の念仏弘通は決して生易しいものでなかった。特に南都北嶺の衆徒の反感は、次第に、上人の身に迫ってきた。

「死罪に処せられても、このことを言わず

にはおれない」

という上人の断乎たる決意は、終に上人を流罪人として、讃岐に行かしめることとなった。

建暦二年（一二二二）正月二十五日に上人は入寂せられたのであるが、念仏の法門はますます盛んになった。旧仏教の弾圧は、これに対して衰えることなく、嘉祿三年（一二二七）六月叡山の衆徒は、上人の大谷の墳墓をあばき遺骸を鴨川に流そうとした。まことにこれ程のひどい仕打ちはない。

これを聞いた上人の遺弟らは、ひそかに御遺骸を嵯峨へ移し、更に太秦の広隆寺に移した。そして、翌安貞二年（一二二八）正月二十日、夜、光明の奇瑞があったので、御遺骸を粟生野にうつし、火葬にしたのであった。その霊跡が、この地なのである。

露の身は

ここかしこにて消えぬとも

こころはおるじ、花のうてなぞ

法然上人の御詠にあるが、まことにこうした経緯を思うにつけても、上人の信念の極を、ひしひしと感ぜずにはおれない。

南都北嶺の仏教に対する浄土念仏の法門の存在は、まさに新興宗教そのものであった。

こうした新しい宗教の発生には、多くの迫害と圧迫があり、断乎としてこれに立ち向う意志なくしては、これを流通せしめる事は困難である。上人も、上人の門弟達も、これを實踐したのであり、それ故にこそ今日の念仏門の流れがあるのである。われわれは、こうした祖師達の信念と実践を、もう一度、この霊跡に立って反省せねばなるまい。

この光明寺の開山は熊谷蓮生坊であるといわれている。源平合戦の勇士であった彼が、その罪の深さを思い、法然上人に参じた時、

「どんなに罪深くとも、念仏を申せば必ず救われる」

と教へられて豁然として語って念仏門に入った人である事は、有名である。

この霊跡にまつわる数々の歴史は、汲めども限りがない。世は混沌とし、人も又、混迷するものの多いこの時、静寂の地に

ゆるぎない光明寺の存在は、隠れた宝玉の様に尊く、そして清々しい。

（安居記）

我は唯仏にいつかあふひ草

心のつまにかけぬ日ぞなき

あみだ仏と申すばかりをつとめて

浄土の莊嚴見るそうれしき

——上人御詠——



（上人火葬の霊場）

江 藤 澂 英 僧 正

高 橋 良 和

(中外日報社取締役)

筑後善導寺の江藤澂英法主が亡くなったのはまだつい最近のことである。

この江藤澂英僧正はまことに忙しい人であって、昔からエネルギーが豊富などころがあり、東京と京都の往復が頻繁であの戦時中の満員の列車を京都の自坊から東京の宗務所へと度々の日がいり往復などもまじえて、当時なみたいていではなかったかと思うのである。

その昔はわたしと同じ会社にいたといってもこの僧正は、中外出版社の偉い方で、わたしはかけ出しの新米記者であつたから、机をならべてものを言ってもらつたようなことはほとんどなかった。

でもこの僧正は宗会議員に当選して、わたくしが浄土宗担当の記者であつたから、議場などではたいそう心やすくしてもらつたし、その後東山中学校長から教学部長になり、更に仏教専門学校、善導寺法主と出世街道まっしぐらのこの僧正とはなにかにつけて終始一緒だったのである。

東山中学校長時代は戦争中でもあり、まして生徒数も著しく減少してきたときにこの僧正もなかなか苦心されたようであつて、如何に手腕家のこの人でもちよつやそつとで中学の経営が出来ないほど困難なときであつたから、戦時中一ばん不振であつた学校経営をひきうけた責任をつ

くづく感じて、ゲートル姿のこの校長の陣頭指揮の姿をよく見かけたものである。

教学部長のときには、軍用飛行機の献納運動に奔走したが、この僧正は尼学校でも教えていただけに尼僧さんたちから絶大な信頼感があり、軍用機の時きも京都の故井上恵薫尼なども多額の戦時の献金があるなど少くとも当時軍用機の献納を浄土宗がやりとげたのはこの江藤僧正の努力があったからである。

この僧正は先にもいったように、なかなかの精力家であったから、教学部長時代には方々に出張したもので、流球の袋中寺の落成や、南洋のサイパン、当時満州帝国にも国教事情の視察で出張しているので口の悪いのは、旅行部長という名前をつけたのがいたくらいである。当時飛行機はなく船旅であるから何日もかかる旅行であったのに、僧正は病氣一つせず実に元気なものであった。

ただ流球出張中に自動車事故で額に傷をうけたことがあったが、それも奇蹟的に生命拾いとなかなか運の強いところもあったらしい。

この僧正は仏教専門学校の校長になったときに、長年の禁を破って、頭髪をのばすことを許したのは有名であって、「頭のことでお寺の息子たちがひがんだ心をもっている

などはもっての外である。一つ頭髪をのばさして、明るい気分をあたえたい」

というので長髪を許したのである。鹿ヶ谷時代から数えて四十年にして頭をのばすことを許されたのだから師匠はにがい顔をしただろうか、学生は話のわかる校長というのでよろこんだにちがいないと思うのである。

もう一つつけ加えておくが、今の仏大の図書館はこの江藤僧正の努力で上村夫人の一建立で建てられたのである。

教学部長の頃の思出をちょっと紹介してみよう。

たしか昭和十三年ぐらいである。全国の仏教普及会の大회가金沢で開かれたことである。

我々もこの仏普大会に参加して、第一日が終わったときである。時間はあるし、旅先のことであるから、金沢の町の見物は当然のこと、出来るなら珍らしいところをみてきたいという好奇心が手つだって、この若き日の教学部長である江藤僧正をひっぱり出して町に出たのである。

若いものが考えることはわかっている。金沢に来たのなら、金沢美人をひと目みたいというので、この僧正に訴えと、よしそれなら金沢の芸者をみせてやろうというなかなかうれしいことばなのである。

みんな口もとほころんだのであるが、そこでこの僧正

は早速町角の店屋にとびこんで、

「この辺にお茶屋があるか、どこか」

とたずねたところ、早速店のおかみさんが店先に出て、指さしてお茶屋のあるあたりをおしえてくれたのである。

まあ旅先だし、若いものときれいな妓をみてたのしむのもよいと考えたのか、さて先頭に立って行った僧正が、

「おーいこの辺だぞ」

と立ち止って、お茶屋らしい家のただ住居をみたのである。一向になまめかしいふんいきもないし、一体どこに我々を遊ばしてくれるお茶屋があるかと、さがしたところあったあった、それも目の前にあるのである。僧正は

『あっはっはっはっ』

と笑った。

よくみるとなんとその店の看板には、「宇治静岡産 茶問屋」とあった。

これならお茶の店である。お茶屋と茶問屋のききちがいである。やっぱりわれわれにはこうした不義は許されないのである。のかもしれない。

僧正を先頭に旅館にかえってふとんをかむってやすんだが、とんだまちがいであったのであくる日の朝食のときにもみんなで笑ったものであった。

表紙の解説

こんがら
衿羯羅童子

浄瑠璃寺蔵

寺伝康円作

恐ろしい怒りに満ちた不動明王。このお顔を拝む人たちには、自分の犯した罪の数々と、自分の心中にうごめくいやしさを見すかされたかのように、怖れと畏敬の念とがこもごも去来するのであろうか。

それにしても、お不動さまの左脇侍である、こんがら童子はまたなんとすみきった顔であろう。さながら、慈父に全服の信頼を寄せている幼児のように。どんなに怒られても、父の怒りは憎くて怒っているのではない。わが子よ、よい子となってくれ、という願いが、子に伝わり、子は怒りのなかに父の真実を知らず知らずに感得している、その姿が、このこんがら童子に象徴されている。不動の怒りと童子の柔和とがひとつに融け合っているが、この童子が大和路への道を歩く片隅にひっそりとたたずんでいるのである。石仏のある田舎道を進むと九体ある阿弥陀堂の脇に、この童子が無心に、すべてを任せきった表情でたたずんでいる姿は、参詣者の心をなごむことは間違いない。無心の合掌は、傷つけあいながら人生の旅路を歩き廻ったものが、ふと立ち寄って見た童子像にいいしれない感懷を抱くに違いない。(石上善応)

公明党の結成

創価学会を母体として、参議院に十五名の議員を送っていた公明政治連盟（公政連）は十一月十七日、公明党として、発展的解消をした。十万の黨員を持つというこの党の代表一万五千を日大講堂にあつめて、盛大な結成式をやったのである。そして党の綱領を発表すると共に、次期の衆議院選挙に出る三十二名の名前と参院選に出馬する十四名の名前まで発表してしまった。もう、彼等は、選挙戦に手廻しよく入ったわけである。政界ではこれについて色々と噂しているが、宗教界でも黙って見ているわけにはいかない。

彼等は、その綱領において、王仏冥合の大理想をかかげて、世界に恒久平知を築こうというのであるが、彼等のいう仏法が、日蓮正宗のみの仏法であるところよりすれば、政治と仏教の冥合は、日蓮正宗を絶対とした上に立ったものであるだけに、極めて危険と言わ

ねばならない。信仰の自由は保証するというのであるが、日蓮正宗以外は邪教とする彼等の今までの主張からして、これが偽謊であることは、知る人ぞ知るである。朝日新聞の社説（十一月十八日）でも、

王仏冥合が結局は、特定の信仰の政治的強制につながりはしまいか、などの疑問が残る。

と指摘している程である。ともすると、巧みな彼等の説明にゴマ化されやすい点を、われわれは注意すると共に、これを一般の人々に知らしめねばならない。目の前に出てくる選挙の結果のみで判断しやすい世の人々を覚醒させなければならない。

これという政策もない極めて抽象的な綱領であるが、憲法改悪反対、第九条厳守、核兵器反対、日米安保体制反対などと、左翼ばりな主張をしているかと思えば、東京都知事選

挙に協力したり、右とも左ともつかぬゴチャまぜの政策である。多種多様の会員構成による欠陥を曝露しているのであるが、烏合の衆としての無見識さも示している。

しかし、この烏合の衆が恐ろしいのである。彼等幹部は、この烏合の衆である大衆の愚を巧みに利用し、扇動して、その力としているのである。このことも、われわれは大衆に自覚せしめねばならない。

今や、学会はその五百万世帯の数と共に、社会的にも大きな勢力となって来た。こうした勢力に迎合する為政者や、知識階級がでてきたことは、悲しむべき事であるが、又われわれも、この事実を無視してはならない。創価学会は邪教であり、迷信であるの一点張りでは、戦いにならぬのである。じっくりと相手の政策なり、信仰なりを分析して、これに対抗するものを持つべきである。

公明党は選挙では勝つかも知れない。大衆の烏合の力を借りているからである。この機会に、傍観を止めて、事実を直視したい。

（在来の「学会手引」を改めて「創価学会手引」と致しました。）

話 童

冬柿のなるころ 永野久子

信三はきょうも、いたずらっ子たちからいじめられていました。

「やーい、小僧の信坊やーい。木魚ポコポコ無南まいだー、わーいわーい」

「小坊主の信公、おまえ、またお寺サかえったら、和尚さんのあとからノコノコ歩いて檀家まわりいくんだろ」

毎日毎日、わるい友だちが二、三人で、こうやって信三をいじめます。

「おまえたちにわかるものか」

信三はこぶしにくっと力をいれて、みんなをにらみつけました。

「南無まいだの信公、わーい、わーい」すると、うしろの土塀の蔭から

「コラ、お前たちはまた信三をいじめているんだね」

といって、西方寺の和尚さんが出てきまし

た。

和尚さんの姿をみつけた子供らは

「わーい、和尚さんだ」

と口々にわめきながら、ちりちりに逃げて行きます。

信三の肩は怒りで波打っています。

信三の唇は口惜しさでぶるぶるとふるえております。いつものことながら信三はこの時ほど、さびしい思いをすることはありません。

「信三、くやしいか。くやしくともしんほうするんだよ」

口はわるいが老和尚さんの言葉には暖みがありました。

「さあ寺へかえろう」

山門を入ると

「どうかいたしましたの」

寺院生活

寸 感

水野愍道

◎寺の行末を熟々心配するのは私ひとりではない。明治、大正、昭和の幾歳月、因習の煤を持って苔ムス寺に暮してきた子弟を持つ人々の実感でなくてなんとしよう。

◎習う経文にビンタ横行の明治は遠くになって当代学窓を出た坊ツチャマ方が、因習寺院の相剋の種々相に哀歎を持つのも無理ない。

◎寺世話人といえは顔役や金持が座を占めて寺も世襲なら寺世話人も世襲だ。

信仰の交流には縁遠いものがある。

これまた無理ない。

◎思いを寺庭婦人によせるならば、住職を補佐して幾歳月、檀家の奉仕、寺門の経営、子女の教育……縁の下の方持ちは決して少くはないが、住職が世を去って老末亡人の末路は寂しい。宗門に寺庭婦人の表彰機関の有無はまだきかぬ。死んでも弔辞一本もない寺庭婦人こそ浮ぶ瀬がない。

坊守りさんが庫裡から顔をだしました。

「ああいつものわんぱくたちだ。なーにすくなれるさ」

和尚さんは笑いながら、信三の頭をなでていいました。居間へ入った和尚さんは

「信三、柿でも食わ

んかい」

といいながら、大きな冬柿をひとつ渡しました。赤い赤い冬柿です

「すみません」

「どれ、わしがむい

て上げよう」

と和尚さんは、ぶきっ

ちよな手つきで包丁を

つかいながら、柿をむ

き始めました。

「なあ信三、小僧へきたころはよくああ

していいじめられるもんだ。しんほうするんだよ。

木魚をたたいて、お経を読むことは決して恥かしいことではない。ほこりをもつん

だ。仏様にお経を上げる坊さんの仕事にはこりをもって、勉強もがんばるんだ。わかったね。

なあに、なれるともうわらうやつは、いなくなる。大きく胸をはって、ぐっとしん

ほうするんだ。仏様のお蔭でご飯をいだけ

る坊さんを、有難いと

思わなければいけない。

さあ柿をたべたら

おまいりにでかけよう

か」

信三はこっくんして

じっと聞いていました

が、やがてにっこりと

笑いました。

もう信三はさっきの

ことなどケロリと忘れていました。

赤い赤い冬柿が葉の落ちきった木に、寒さの中でじっと耐えているそんな頃になると、信三は幼いころの思い出をなつかし

み、あの冬柿の味を思い出すのでした。



◎拙著「寺院生活」は、明治、大正、昭和の

時の流れが、寺に暮す人々に与えた六十年の

苦と喜びを、著者自らの体験を描いて私小説

に書いた実録である。従って、「寺院生活」

に登場する人物、時代、時所、寺庭、学校、

塾、風物など、悉く実在であってウの毛でつ

くほどのウソはない。

◎むろん、私の寺院暮らしの半生は法事三昧で

あった。今でも私は葬式法事のみに暮してい

る。宗脈相承の伝法を死者に贈って喰ってい

るいわば檀家の雲にのって暮している私にし

かすぎない。

◎筆者のおやじが荒れ寺を起して三十年。一

本気の一生を終った。

「坊主は報酬を考えてなすべきでない、有難

い天職とおもって寺に生きるのだ」

これこそ、私に与えた臨終の声だった。

◎六十年、苦と楽の拙著「寺院生活」は、前

にもいった私の随想であり、ときに私小説と

もいえるが、さらにつけ加えるならば寺に住

む世代の男女がわが寺の未来図をつくる構想

でもある。

正 氣 の 沙 汰

——往生するのはいつか——

洪 谷 賢 応

信州の山奥の、そのまた奥の山寺に住職していると、とてもない賢問愚問にぶつかる。

昨日も葬儀の場所へ出棺をまつ間、退屈しのぎの雑談の中で、話し上手の広人さんがこんなことを言いだした。

「お釈迦さまも、善いことをすりゃあ極楽にいける、悪いことをすりゃあ地獄に落ちるなんて、二千年昔に言いだしたで浄土宗もこれだけ広まったが、今の若けえ者をつかまえてそんなことを言っただけだれも本気になんかしねえぜ」

すると隣の英夫さんが相槌打って

「そうだとも、今の若え衆に藪から棒にそんなことをきり出したって、てんで正気の沙汰にやしねえよ」

やいやい、これは又珍説当来、さてさてよ、どうも和尚というものは、何かわからんことを聞かれると自分の責任のようには言いわけしたくなっていけねえ、どんな顔して言っとるか、もちっと見てやれ、と思って知らん顔をして煙草をふか

していた。向うもなかなかのもの、和尚してやったりと言うわけにこにこしている。

「今の若けえ衆なんか、死んだ先のことなんか思っちゃいねえ、俺らだってそうだなあ」

と広人さんは若けえ衆をだしに使うことをひっこめて自分のことに持ちこんだ。

こんな連中の中で葬式する山寺の和尚、又つらきかなである。

「生きとるうちさえよけりゃまあいいっちゃうもんだ。死んだ先のことはわからねえでなあ」

英夫さんはさっきの元氣もなくややしょぼしょぼして来た。

「わからねえで阿弥陀さまに、なむあみだぶつって頼むんだ」

と言うと

「そうかなあ」

と言って二人ともあとは笑いだした。

そう言いながらも、やっぱり死後には地獄より極楽の方へ行きたがっているのである。

浄土宗は死んで極楽に往生すると言うことを表に出しすぎる。今、この今生こそ大切に来世の事など言っても納得できない。このようなことを聞いたたびに思い出されるのは法然上人の平生臨終の御法語である。

「問うてはいはく、摂取の益をかうふる事は、平生か、臨終かいかむ。答てはいはく、平生の時なり。そのゆへは、往生の心まことにて、わが身をうたがう事なくて、来迎をまつ人は、これ三心具足の念仏申す人なり。この三心具足しぬれば、かならず極楽にうまるといふ事は観經の説なり。かゝる心ざしある人を、阿弥陀仏は八万四千の光明をはなちててらし給うなり。平生の時てらしはじめて、最後まで捨て給はぬなり。かるが故に不捨の誓約と申す也」

阿弥陀仏のみ光に照されて、往生するということは、今生か、来世か、の問に対して、上人は言下に「平生なり」と断言せられているのをこの上もなくありがたく思う。ただし「わが身をうたがうことなく」と「三心具足」というただ

し書きがついている。「わが身をうたがうことなく」とは自分が阿弥陀仏に救いとらせていただけに足るものと信ずることである。たしかに広人さんや英夫さんの話にあるように、昔の人はこの「わが身をうたがうことなく」お念仏ができたかも知れない。とすると、今の人は、極楽をうたがうみ仏をうたがい、往生をうたがう前に、「わが身をうたがうて」いて「心まこと」になり得ないということになる。

「わが身をうたがう」ことを以て現代人の特性とすれば、こんなあわれな現代人はないと思わなければならぬ。自らを虚無にした、自信喪失の亡霊でしかないのである。

「心まことに、わが身をうたがふことなく、三心具足しぬれば、阿弥陀仏に八万四千の光明をはなちててらし給う也」でこの時より極楽の中にいることに気づかせていただくので、「平生の時てらしはじめて、最後まで捨て給はぬなり」と力強く言及せられている。

今の人たちは、極楽を、往生を、み仏を、だれかの作品、絵空ごとと考えて正気の沙汰にしないのである。これはあながち信州の山奥の、広人さんや英夫さんばかりではあるまい。山村も、都市も、僧も、俗も、みなみ仏を心まことに考へなくなっているのではあるまいか。これこそ正気の沙汰ではないと思うのである。

— オリンピック大会に出場して —

カヌー選手の友情

東 山 日 出 夫

〔大正大学・真言宗四年生〕

カヌー競技はベルリン大会から正式種目になっていったが、日本の出場は今度始めてであった。そして、出場選手の一人として僕も出場することとなった。昨年、一昨年と、千葉（大正大学四年浄土宗）と私は外国に行き、

東京大会のため多くの技術を学んで来た。しかし四年ばかり漕ぎでは、オリンピックの決勝に残ることは仲々、難しいことであった。

私は第一レースシングル予戦一組に出場した。前半飛び出して良かったのであるが、結局ビリになってしまった、そして、予戦二組では、ボリビアの選手がビリであった。

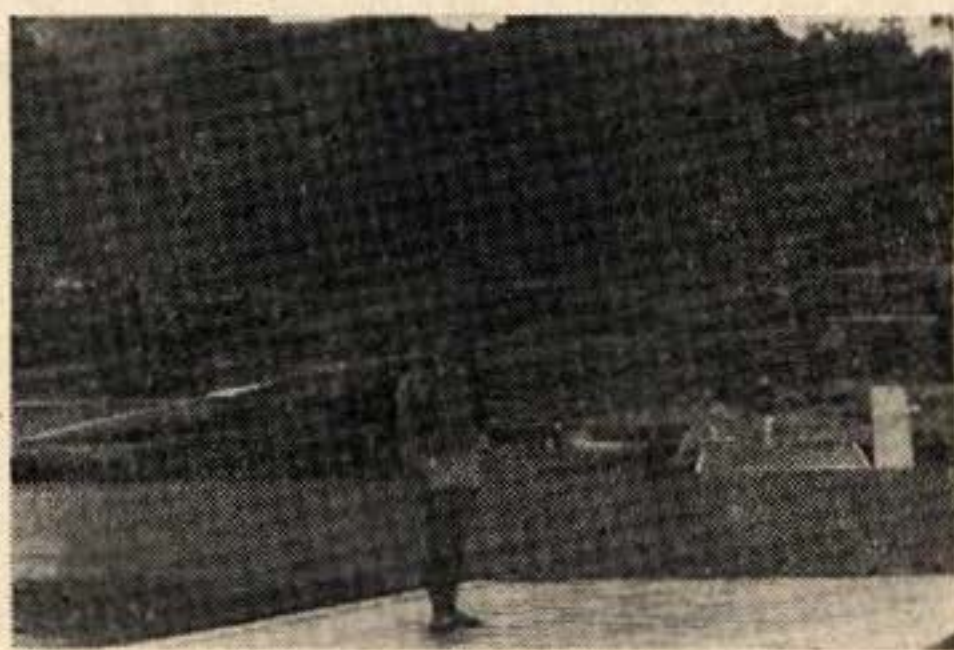
ところで、このボリビアの選手は、たった一人国を代表して自費参加した男で、開会式の時、ただ一人旗手だけで参加して、万雷の拍手を受けたことは、あまりにも有名である。私も彼も、組合せがきまった時から、ビリになりそうであった。そして予想通りビリになってしまった。予戦の終わった時彼は、私をさがし出し

「お前はどうかだった、おれはラストだった」と話しかけて来た。私が

「俺もラストだった」

と云うと、彼はニコリと笑い、握手をした。肩かたたき合ったりして

「メキシコでは頑張ろう。俺はメキシコまでには強くなってくる。お前もメキシコには強くなつて来い」



（筆者）

といい、あとはボリビアの言葉で一生懸命はげましてくれた。大会が終って別れる時、私が日本語で

「お前も元気で頑張れよ」と云ったら、

「OK」

と日本語が分かったような返事をし歩いて行った。弱い男がたった一人で来たのだからと思ひ、大会前からめんどろを見てやっていたのですが、本当に明るい良い選手であった。今頃、彼はメキシコを目指して頑張っているに違いない。

午後行なわれた敗者復活戦では、オランダアメリカと当たった。向い風が強く波が立ち大変な悪コンディションであったが、スタートから飛び出し、そのまま一位でゴールに入ることが出来た。一番苦しい七五〇メートルあたりから

「東山、東山」

と応援の声がしきりと聞え、ラストスパートにもその声を背にしながら頑張った。学校から応援に来てくれた友人も大変喜んでくれた。本当に嬉しく思った。はるばる比叡山から来て下さった葉上先生も

「ワシと握手したから勝てたんや」

と云って涙をためて喜んでくださった。翌日の準決勝では四位になり、決勝には出られなかったが、体調も良く自分のベストが出せた

のは、せめてもの慰みであった。

オリンピックは、出場することに意味があると云われる。その点では、私も目的を果たしたのであるが、競技である以上、やはり勝た



(外国選手と筆者)

なければならぬ。それを果し得なかったことは、何としても残念でならない。次の大会では必ず仇討ちをしてやろうと、私は部員達と堅い決意をした。

大正大学にカヌー部が出来てから歴史は古い。そして、カヌー部と云えば大正大学と云われる程であったのであるが、近年は、大分他でもやる様になり、切角日本で大会が開かれ、しかも初参加である時に、私一人しか出られなかった事も残念であった。

競技は、体力と共に精神力である。どのスポーツもそうであるが最後は、自己との戦いである様に思われる。仏教精神で、こうしたものを養うのも、大正大学でなら出来ることである。こうした意味で、今後、そくそくと立派な選手が出て、母校の名をあげる様に願って止まない。

業界一の銅瓦葺専門店 広告の責任重し
何代も研究せる卓越なる技術は他所の出来ざる価値ある技量と優美頑強安価を誇る
赫々たる定評ある当方へ。建設者請負業者も他所の倍以上保つと他の広告に迷わず遠方でも是非とも設計相談乞無料

東京都文京区春日一丁目九の二八

石 黒 工 業

電(八一二) 一五五一

日本浄土教物語

日本浄土教発達の由来

鈴木 成 元

(大正大学講師)

天平三年(七三二)九月八日、聖武天皇は王居士隋大業主などシナの六朝・隋・唐などの人々が作った仏教に関する詩文百余詩を書写した。それは『聖武天皇宸翰雜集』といわれて正倉院御物の中に現存している。この一つに「隋大業主浄土詩」というものが収められている。これには煬帝ようていの作と見えるが、実は隋の彦琮げんそうの作った唱導法である。いうまでもなく極楽浄土に往生を願う礼讃偈で、浄土の情景を歌った長い詩文である。これは善導の『六時礼讃晨朝偈』などにも引用された立派なものであるが、現在シナにはなく、まことに貴重なものである。

多くの人々は日本国が最初から統一された国家であるように思っている。従来はそう教えてきたので無理のないことではあるが、事實は決してそんなものではない。弱小な独立政

権が乱立する不統一な国家であった。その中で大和政権が強力になり、これらの弱小な独立政権を機構の中に組入れてゆくのである。しかし日本全国を統一するまでには長い時間を必要とするのである。シナの組織にならって『大宝律令』などができて、これは表面的なものであり、完全なる有機的な国家は近世になり豊臣秀吉の出現を待たねばならなかった。

それはそれとして、仏教が皇室に採用されたのは用明天皇の時である。その後推古天皇は仏教興隆の詔みことりを出し、聖徳太子は仏教を深く研究し、大陸文化の移入につくされた。シナからの帰化人も大きな力となったが、遣隋使の貢献も見落せない。小野妹子をはじめ、僧旻そうみん・高向玄理たかむねのくろみらは有名である。「浄土詩」はこれらと一緒に渡航し、三十年間現地で勉

学し舒明天皇十一年(堯)に帰朝した僧の慧隱えいおんが伝えたといわれる。そうすると今から一三〇〇数年以前に早くも西方極楽浄土の信仰があったといっても過言ではないであろう。

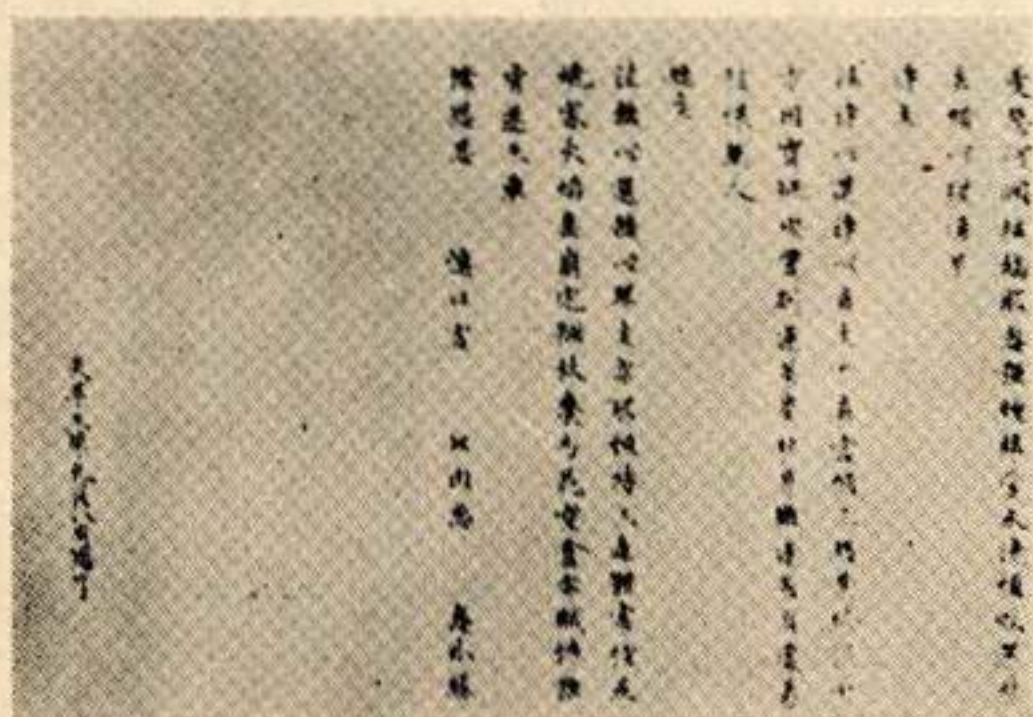
慧隱は帰朝した翌年五月、舒明天皇に『無量寿経』を講義し、孝徳天皇の白雉三年(堯三)四月にも十五日から二十日まで御前講義をし一千人の沙門もその時出席して聴いたと『日本書記』には書かれている。この事実をもって、ただちに天皇や沙門に浄土信仰があったと簡単に肯定することは危険である。いうまでもなく仏教そのものが最先端をゆく学問であり『法華経』『勝蔓経』など、いろいろな經典が読まれ、仏会が行われていたからである。しかしこの中に浄土教関係の經典や詩文が出てくるといふことは見逃がすことができない。極楽往生を願う実例として最もよく現われているものは、王延孫の釈迦像光背である。これはもと法隆寺にあったもので、今は御物になっている。この光背の銘に、

甲寅年三月廿六日、弟子王延孫、奉_レ為現在父母、敬造_二金銅釈迦像一軀、願父母乘_二此功德、現身安隱、生生世々不_レ經_二三塗、遠離_二八難、速生_二浄土、見_レ仏聞_レ法、

とある。ここにある甲寅の年というのは明かではない。けれども光背の様式などからみて白雉五年(堯四)ではないかといわれる。文面からは非常に親孝行の息子で両親のために金銅

の釈迦像を造ったことがわかる。仏舎を建てたり仏像を造ることはその功德を受ける当時の思想ではあるが、三塗八難を離れて浄土に生れるという表現は極楽浄土を意味するものであろう。両親が健在のときは現身安隱であり、死んだ後は極楽浄土に生れてほしいという気持がよくあらわれている。金銅の釈迦像を造るということは大変である。経済的にも相当に余裕のあった人であろう。またかなり仏教に対する理解もあった人のようではあるが、王延孫の伝記は明らかでない。

さてもう一つの好例は阿弥陀像の出現である。銘のあるものでは観心寺のものが古い。これには、その光背に戊午の年とある。戊午の年とは斉明天皇四年(堯六)であるが、傑作は法隆寺にある橋夫人の念持仏といわ



(正倉院・聖武天皇宸翰雜集)

れる阿弥陀三尊であらう。

法隆寺には二つの宮殿形の厨子がある。一つは飛鳥様式の重要な資料となつてゐる玉虫の厨子であり、いま一つはこの橘夫人の念持仏の厨子と呼ばれてゐるものである。この厨子に納められてゐる阿弥陀三尊像は実に可愛らしいもので、天武天皇（五十九）の作と伝えられてゐる。

これは後世のものに見られる華美な装飾で莊嚴されたものではないが、卓抜な構想のもとに、すっきりと阿弥陀浄土の有様を表現したものである。開ききつた大きな蓮弁は童顔のようにいじらしい阿弥陀像を包むようであり、両側には蕾の固さを残してゐる蓮華座に観音・勢至が立っている。これらは一見かたそうに見えるが、池の水面から支えるわずかに捻った茎と、後屏に浮きぼりされた華に憩う天人と風に翻える天衣の巧みさ、また精緻な透し彫りの円光背は素晴らしい表現を見せてゐる。この調和のとれた硬軟の構成が美しさを倍加させてゐることはいうまでもない。もうこの仏像には飛鳥彫刻からの脱皮があらわれていると同時に極楽浄土への表現も進んが来たことを如実に物語るものといつてよいであらう。一方絵画の方でも忘れてならないものがある。それは誰にでもよく知られてゐる法隆寺金堂の壁画である。弥陀の浄土を絵で表現したものであり、ここに一つの形式が打ち出され

てくるのである。なお天武天皇の追福のため新羅しらぎの使節がたてまつった像の中には阿弥陀像がある。新羅の使節であるからこれのみでどういふことはひかえるが、持統天皇六年（六五）にも唐の大使郭務悰が天智天皇のために阿弥陀像をたてまつったことが『日本書紀』に出てゐる。こうしてみると唐や新羅の貴族の中には、追福のために阿弥陀像を送る習慣のようなものができており、そのような思想が極楽浄土往生を願う思想に一層拍車をかけていたのであらう。

この時代の熱心な西方願生者は智光であらう。天武天皇ごろの人と思われるが、河内（大阪府）の人である。礼光とともに智蔵に学び三論宗に属する人であるが、礼光の死後、夢の中で礼光が阿弥陀仏の極楽浄土に往生したことを見た。そこで早速画士を呼び、その有様を画かせた。これが、「智光曼荼羅」である。智光は元興寺内に極楽院を建ててこれを安置した。そればかりではない。智光は『往生論疏（『浄土論疏』とも『原称無量寿経論釈』ともいう）五巻を著わした最初の著述家であつた。これは天親の『浄土論』の注釈書であるが、今は伝わっていない。新羅浄土教の影響を多く受けたもので、今は逸書となり伝わってはいない。しかし良源の『九品往生義』、源信の『往生要集』、源隆国の『安養集』、良慶の『安養抄』、長西の『論註鈔』など、平安から鎌倉時代にかけて、

多くの浄土教関係の書中に引用されている。そしてその原形が推察できるところまで研究が進められている。いかに智光の力が偉大なものであったか今更いうまでもないであろう。

以上いろいろな例を引きながら奈良朝以前の浄土教、つまり日本における浄土教の萌芽期をのべて来た。人により、また立場により様々な説

も展開されるであろう

が、歴史を専攻の私の

立場としてはこのぐら

いにとどめたい。はじ

めに絶対者において、

それがだんだん崩れて

行くという考え方は東

洋人に一貫した思想の

ように思われる。なる

ほどそれもあるう。し

かし不完全なものがよ

り完全なものに発展してゆくのも事実である。その発展を認

識するのが歴史の学問でもある。そのような立場に立ち、こ

れから後数回にわたって連載する予定の「日本浄土教物語」

をみてゆきたいと思う。



(橘夫人・阿彌陀三尊像)

盆も正月もない十年間

以来、やく十年間。わたくしたちには春夏秋冬の遊びもなければ、日曜・祭日も、盆も正月もなく、来る日も来る日も、ただいちずに練習につぐ練習でした。

そして都市対抗六回、国体三回、実業団三回、全日本総合四回、というふうには、国内のタイトルを総ざらいし、さらに六人制バレーを他チームにさきがけて採用し、世界選手権日本代表を決する昭和三十三年の第一回全日本女子六人制に優勝。完全に日本一となったのです。「先んずれば人を制す。」のことわざどおり、六人制でも日紡貝塚チームは国内無敵になりました。しかし、欧米・ソ連のバレーはすべて六人制なのです。これをマスターしなくては勝敗どころか、まず、国際試合に出場すらできません。

世界に打って出よう。それには――。

こうしてわたしたちは、今日かちえた世界選手権への第一歩として、昭和三十四年、六人制チームを編成し、人の目をおおわせるようなきつい練習と創意・くふうにはいったのです。

大松博文著 「おれについてこい」より

ご法語をいただく

うけがたき人身をうけ、あひがたき仏法にあへり。無常念々にいたり、老少きはめて不定なり。やまひきたらん事かねてしらず生死のちかづく事たれかおぼえん。もともいそぐべし。はげむべし（念仏往生義）

このご法語は日常生活の根本を示されたものであります。その第一は、こうして呼吸しものを考えているということ、犬でもなく猫でもなく人間としてこの世に生きているのであるということの感謝であります。生物は生れかわり死にかわり、いろいろの世界に生きてゆきます。その世界を六つに分けて地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天とします。この六つの世界をめぐるってゆく姿を六道輪廻といいます。時間的にも空間的にも広大限りない世界にあって、現在は人間として生きているということを改めて覚らねばなりません。「六道をめぐるに、人身をうる事は、梵天より糸をくだして、大海のそこなる針のあなを

とをさんがごとし」

と他のご法語にある通り、人間として生活していることの喜び、その奇縁さを自覚することが第一に必要な基礎であります。

そして第二には、お念仏の法門に縁を結べたという稀有な有難さを身にしみて知らねばなりません。津戸三郎にも熊谷入道にも同じように次のご法語をお示しになっています。

「受けがたき人身すでに受けたり、あいがたき念仏往生の法門にあいたり」

わたくしたちは、今こうして生きているという姿をとかく軽視したり忘れたりしがちであります。日々を無事過させていただいている喜びを無視し易いものであります。しかしうかつに暮しては、真の道は開けるものでありません。

今こそ健康に恵まれていても、必ず病気になることがあります。いかに細心な注意を払っていても病気を避けることはできません。

まして少年が壮年に、壮年が老年になることは当然のこととして誰にもきます。不老長寿の薬は絶対がないのであります。しかも実際に気のついた時にはいつか年老いているとい

うわけであります。いつ病気になる、いつこの世と別れるかは誰にもわかりません。今日かも知れません、明日かも知れません。すべての物体が永遠であり得ないと同様に、人の身は明日の日も知ることができません。

「もとも」の「もと」は本来ということであります。そして「も」は意味を強める助詞であります。そして「いそぐべく、はげむべし」は申すまでもなく、お念仏を申すことをいうのであって、明日とはいわず今すぐお念仏を唱えなさい、そして勤めてお念仏を申しなさいということでもあります。

「念仏往生義」にあっては、このご法語に続いて、

「念仏に三心を具すといへるも、これらのことはりをばいせず」

とあります。お念仏を申すには三心を具えることが大切であります。こうした今の生活の実態をとらえて申すお念仏こそ、三心具足のお念仏であるといわれました。お念仏は理くつで判るのでなく、生活からにじみ出た体得で味えというのであります。

（村瀬 秀雄）

編集後記

▽新年に当り、読者各位の御多幸と御繁栄を祈念し奉ります。併せて「浄土」の発展を各位共々に努力いたしたいと存じます。

▽浄土宗も、新内局と新宗会が成立し、新しい出発をすることになりました。何と云っても、仏教会はもともとと奮発しなければなりません。いろいろな意味で大いに頑張りたいと思いますので、よろしく御協力願います。

▽新企画の一つとして鈴木先生の「日本浄土教物語」を掲載することになりました。意欲的な先生の執筆を希期します。前に牧田先生

の「中国浄土教物語」に続くものです。勿論、牧田先生は途中で終わっていますので又お願いすることにいたします。

▽随筆、高橋先生の交名録は評判が宜しいので続いて掲載させて頂きます。

浄土風土記は、出来るだけ広く、浄土の史蹟を防ねて続けるつもりですが、果して、どれ程続くか、編集部は努力如何にかかっています。

創価学会は時節柄重要なことであるので、出来るかぎり紹介いたします。

▽藤井先生には、久し振りに御寄稿頂きました。浄土信仰の問題を設問的にお説き頂くことになりました。五回程連載願う予定です。御期待下さい。

年末年始には鑽仰会の施本で

浄土宝暦

おくってよろこばるれ
四十年宝暦

価格 一部 二十五円 十円

百部以上 単価 十八円

内容 浄土宗信徒心得

一枚起請文

年回表 その他

暦記事満載

四十年版 修養ひめくり

価格 七十円 三十円

体裁 タテ 43 CM ヨコ 14 CM

用紙十七枚 二色刷

四十年度日曜表付

五十部より 単価 六五円 送料

百部より 六〇円 実費

法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田町一丁目二番
電話(262)5944
振替 東京八二一八七番

年 新 賀 謹

東京都文京区小石川三丁目十四番六号

伝通院住職 大河内隆弘

電話(811)局 〇三〇七番

岩手教区長

岩瀬吉雄

盛岡市名須川町八の四・光台寺

祐天寺住職 巖谷勝雄

東京都目黒区中目黒三ノ一〇六七

千葉市 大巖寺

長谷川良信

杉田義俊

葉山町 相福寺・明照幼稚園

新年おめでとう存じます。

平素の御懇情を謝上ます。小生今年六十七年目の歳を迎え、八人の子女各々独立、最後の娘が本年嫁ぎますが、但し小生は、女房一人完全に教化出来ない愚物です。これから幾年生かされても天地一切の恩に酬ゆるよう心がけますから何卒一層の御指導を。

静岡市日吉町二ノ二

浄土宗静岡教区長

華陽院住職 堀田良謙

阿川貫達

戸松学瑛

長野仏教会長

丸山宗隆

長野市茂菅 静松寺

明照幼稚園

清水こども園

隆崇幼稚園

芝幼稚園

法然上人鑽仰会

佐藤密雄 宮林昭彦

佐藤良智 安居香山

中村康隆 佐藤行信

村瀬秀雄 水谷哲雄

竹中信常 当間寿海

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 正月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十九年十二月廿五日 印刷

昭和四十年一月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区飯田町一ノ廿二

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

横濱東京八二一八七番